韓国語における「移動動詞」をめぐって[*1]
——「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」を中心に——

安　　平　鎬

0.　はじめに

韓国語の移動動詞には，例えば，（1）のように，「V」と「V+a(e)kata /ota」の対応を示す動詞類がある。[*2]

（1）a「olu-ta(오르다)：あがる」　「ol-a kata(올라가다：あがっていく)」
　　「ol-a ota（올라오다：あがってくる」
　　b「na-ta(나다)：出る」　「na-(a)kata(나가다)：出ていく」
　　「na-(a)ota(나오다)：出てくる」
　　c「tul-ta(들다)：入る」　「tul-e kata(들어가다)：入っていく」
　　「tul-e ota(들어오다)：入ってくる」
　　d「nayli-ta(내리다)：降りる」「nayli-e kata(내려가다)：降りていく」
　　「nayli-e ota(내려오다)：降りてくる」[*3]

先行研究では，これらの動詞に対しては，主に動詞の下位分類という観点から移動動詞の中にどう位置づけられるか，の問題に関心が向けられており，具体的に「V」型と「V+a(e)kata /ota」型がどう違うのか,等についてはあまり検討がなされていない。

本稿では，特に（1）aの「olu-ta(오르다)」と「ol-a　kata(올라가다)」を取りあげて「V」型と「V+a(e)kata /ota」型の違いに関わる解釈の一部を明らかにする。

1.　日本語との対照

まず，日本語の「あがる」という動詞の用法（（2），（3））と，韓国語の「oluta

(오르다)」及び「ollakata (올라가다)」という動詞の用法((4),(5))について検討する。

(2) a　国旗が塔にあがる。
　　b　太郎が塔にあがる。
(3)　太郎が国旗を塔にあげる。*4

日本語の「あがる」の場合，動作主の意志による，動作主自身の位置変化の意味を表す(2)bは，ガ格名詞（太郎）の移動を表すが，客体の移動の意味を表す(3)は，ヲ格名詞（国旗）の移動を表す。(2)aは，(2)bと同様にガ格名詞（対象(THEME)/国旗）の移動を表すが，主体の意志的な行為による移動ではない，という点において(2)bと異なる。

(4) a　국기가　(오른다/올라간다).
　　kwukki-ka (olu-n-ta/ollaka-n-ta)
　　国旗　　が　あがる
　　国旗があがる。
　　b　다로가 게양대에　(*오른다/올라간다).
　　talo -ka keyyangtay-ey (olu-n-ta/ollaka-n-ta)
　　太郎　が　掲揚台　　に　あがる
　　太郎が掲揚台にあがる。
(5)　다로가 국기를 게양대에　(?올린다/게양한다).
　　talo -ka kwukki-lul keyyangtay-ey (olli-n-ta/keyyangha-n-ta)
　　太郎　が　国旗　　を　掲揚台　　に　あげる/掲揚する
　　太郎が国旗を掲揚台にあげる。

韓国語の「oluta (오르다)」と「ollakata (올라가다)」に関しても，ほぼ日本語の「あがる」と同様のことがいえるであろう。動作主の意志による移動の場合，動作主自身の位置変化の意味を表す(4)bは，(日本語のガ格に相当する)「i/ka (이/가)」格名詞の移動を表し，客体の移動の意味を表す(5)は，(日本語のヲ格に相当する)「ul/lul (을/를)」格名詞の移動を表す。(4)aも，(4)bと同様に「i/ka (이/가)」格名詞の移動を表すが，主体の意志的な行為による移動ではない。(「oluta (오르다)」と「ollakata (올라가다)」の用法

の違いについては後述）

これらの例を見る限り，日本語の「あがる」と韓国語の「oluta（오르다）」及び「ollakata（올라가다）」はかなり類似しているかのように見える。

（6）a　国旗が掲揚台に（あがる/あがっていく）。
　　b　掲揚台に国旗が揚がる。
（7）??국기가 게양대에 올라간다.
　　kwukki-ka keyyangtay-ey ollaka-n-ta
　　国旗　　が　掲揚台　　に あがる
　　国旗が掲揚台にあがる。

日本語の場合，（6）は，問題なく成立する。また，（6）a，（6）bからわかるように，ガ格成分とニ格成分の語順変化に関しても問題ない。

韓国語の（7）は，（4）aに「게양대에（掲揚台に）」という場所成分が加えられた文であるが，（4）aと（4）bに比べて，かなり許容度が下がる。許容されるとすれば，国旗が擬人化された（AGENTとして解釈される）文として解釈される場合である。

（8）　게양대에 국기가 올라간다.
　　keyyangtay-ey kwukki-ka ollaka-n-ta
　　掲揚台　　に 国旗　　が　あがる
　　掲揚台に国旗があがる。

（8）は，（7）における「i/ka（이/가）」格名詞成分と「ey（에）」格名詞成分の語順だけが入れ替わった文であるが，問題なく成立している。（7）と（8）から，韓国語では，文の成立において動詞と格との関係だけではなく，語順も重要な働きを果たしていることがわかる。（詳細については後述）

また，繰り返しになるが，日本語の「あがる」の用法には見られない点として，韓国語の「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」には，「i/ka（이/가）」名詞句と動詞の関係の上で，使い分けがある（詳細については後述）。[*5]

(9) 다로가 지붕에 (*오른다/올라간다).
talo -ka cipwung-ey olu-n-ta/ollaka-n-ta
太郎 が 屋根 に あがる(のぼる)
太郎が屋根に上がる(のぼる)。

(10) (불쾌지수/물가/성적)(이/가)(오른다/올라간다).
(pwulkhwayciswu/mwulka/sengcek)(i/ka)(olu-n-ta/ollaka-n-ta)
(不快指数 /物価 /成績) が あがる
(不快指数/物価/成績)があがる。

(11) (연/연기/국기)(이/가)(*오른다/올라간다).
(yen /yenki /kwukki)(i/ka)(olu-n-ta/ollaka-n-ta)
(凧 /煙 /国旗) が あがる
(凧/煙/国旗)があがる。

以下では,(9),(10),(11)に関連し,「oluta(오르다)」と「ollakata(올라가다)」と共起する名詞との格関係,「oluta(오르다)」と「ollakata(올라가다)」のアスペクト的な特徴,及び(7),(8)で見た語順との関連から一般化を試みる。

2. 韓国語の「oluta(오르다)」と「ollakata(올라가다)」

2.1.動詞「oluta(오르다)」と「ollakata(올라가다)」がとる格

物理的な位置変化を表す場合,(12)に示したように,「oluta(오르다)」という動詞は,「着点」の意味を表す「-ey(에)」格成分を,「ollakata(올라가다)」という動詞は,「着点」の意味を表す「-ey(에)」格成分もしくは「方向」の意味を表す「-(u)lo(으로/로)」格成分などを必ず取る。[*6]

また,(13)は,抽象的な名詞が主格として用いられた場合であるが,「-ey(에)」「-(u)lo(으로/로)」格成分がなくても成立する。((13)については,後述)

(12) a 다로가 정상(에/*으로) 올랐다.
talo -ka cengsang-ey/ulo oll -ass-ta
太郎 が 頂上 に あがる た
太郎が頂上にあがった(のぼった)。

b　다로가 정상（에/으로）올라갔다.
talo –ka cengsang –ey/ulo ollaka –ss–ta
太郎　が 頂上　　に　あがる　た
太郎が頂上にあがった（のぼった）。

(13)　（불쾌지수/물가/성적）（이/가）（오른다/올라간다）.(＝(10))
(pwulkhwayciswu/mwulka/sengcek) (i /ka) (olu–n–ta/ollaka–n–ta)
（不快指数　　/物価　　/成績）　が　あがる
（不快指数/物価/成績）があがる。

(12)は動作主(AGENT)が主格として用いられた場合であるが，意志をもたない対象(THEME)が主格である場合は，少し事情が違う。(7)と(8)で述べたとおり，意志をもたない対象(THEME)が主格として用いられた場合，「NP i/ka（이/가）→NP ey（에）→述語」という語順では成立しない。

(14) a　풍선이 하늘에（*오른다/??올라간다）.
phwungsen–i hanul–ey (olu–n–ta/ollaka–n–ta)
風船　　が 空　　に　あがる
風船が空にあがる。

b　풍선이 하늘로（?오른다/올라간다）.
phwungsen–i hanul–lo (olu–n–ta/ollaka–n–ta)
風船　　が 空　　へ　あがる
風船が空へあがる。

(14) a の場合は，文として成立しない。ただし，(7)と同様に，(14) a の「ollakata（올라가다)」を述語とする文の場合，「phwungsen（풍선：風船)」を擬人化した表現なら成立する。

(15)　<u>하늘에</u> 풍선이（?오른다/올라간다）.
hanul–ey phwungsen–i (olu–n–ta/ollaka–n–ta)
空　　に 風船　　が　あがる
空に風船があがる。

また，(8)と(15)は，(7)と(14) a の各々の文の語順を「NP ey（에）→NP

i/ka（이/가）→述語」に変えた文であるが，（7）と(14) a とは対照的に文として成立している。(16)に対しても同様なことが言える。

それでは，（7），(14) a，(16) b と（8），(15)，(16) a の許容度の違いは何故生じるのか，という疑問が生じてくる。

(16) a　감자에 싹이 났다.
　　kamca-ey ssak-i na -ss-ta
　　ジャガ芋に　芽　が出る た
　　ジャガ芋に芽が出た。
　b * 싹이 감자에 났다.
　　ssak-i kamca-ey na -ss-ta
　　芽　が ジャガ芋に 出る た
　　芽がジャガ芋に出た。

（7），(14) a の「NP ey（에）」という成分は，義務的な成分ではない。また，「国旗があがる」とか「風船があがる」という事態は，動作主によって CONTROL されるような事態ではない。これらの事態には，その事態を引き起こした要因（「原因」）が背景化されているかもしれないが，文脈などの支えがないかぎり，「意志的な CONTROL」という要素はここには関与しないのである。「国旗があがる」とか「風船があがる」という事態はいずれも，そのような状態が自然に存在する，あるいは自然に発生するという意味である。

（8）と(15)における「NP ey（에）」という成分は，語順制約現象も考え入れると，「国旗があがる」とか「風船があがる」という事態が存在する場所あるいは発生する場所を表しているのである。

それでは，なぜ発生の意味を表す構文にはこのような語順制約があるのかが依然問題として残っているが，この問題は，「人が人と対話を行う際，対話の場に存在しない物より既存物を先に提示する」という説明で解決できるであろう。「発生」とは，その場に存在しない物や出来事が新たに現れる(出現する)，という意味なのである。存在しない物や出来事を既存物より先に話題にするのは，自然な対話ではないように思われる。もし，そのような対話があるとすれば，前の文脈などで話題にあがっている成分か，焦点が当てられている成分，つまり有標(marked)的な成分になる。

(17) a ?이슬이 꽃잎에 내렸다.

isul –i kkochiph–ey nayli –ess–ta

露　が 花　　に 降りる　た

露が花に降りた。

b 꽃잎에 이슬이 내렸다.

kkochiph–ey isul –i nayli –ess–ta

花　　に 露　が 降りる　た

花に露が降りた。

(18) a * 피가 얼굴에 난다.

phi–ka elkwul–ey na–n–ta

血　が 顔　　に 出る

血が顔に出る。

b 얼굴에 피가 난다.

elkwul–ey phi–ka na–n–ta

顔　　に 血　が 出る

顔に血が出る。*7

「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」という動詞を述語とする文だけではなく，(17)，(18)など，「そのような状態が自然に存在する，あるいは状態が自然に発生する」という意味を表す文は，「NP ey（에）→NP i/ka（이/가）→移動動詞」という語順がもっとも自然である。

動詞「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」動詞とこれらの動詞がとる格成分との関係をまとめてみると，次のようになる。

①動作主「i/ka（이/가）」	**場所名詞「ey（에）」**（着点）	「oluta（오르다）」 「ollakata（올라가다）」
②場所名詞「ey(에)」（存在場所あるい発生の場所）	対象「i/ka（이/가）」	「ollakata（올라가다）」
③	抽象名詞「i/ka（이/가）」	「oluta（오르다）」 「ollakata（올라가다）」

以下では，①，②，③を各々タイプⅠ，タイプⅡ，タイプⅢと呼び分けることにするが，「タイプⅡ」の場合，場所成分が加えられると，厳しい語順の制限があることを指摘しておく。また，タイプⅡに見られる語順制約については，(19)，(20)のような日本語における発生の意味を表す構文と，(21)，(22)のような英語の場所句倒置構文(Locative Inversion Construction)と関連して(英語の(21) bと(22) bが非文にはならないことも含めて)普遍的な一般化が可能に思われるが，具体的な議論については別稿に譲りたい。

(19) a　目に涙があふれる。
　　b ? *涙が目にあふれる。
(20) a　ジャガ芋に芽が出た。
　　b ? *芽がジャガ芋に出た。
(21) a　A lamp was in the corner.
　　b　In the corner was a lamp.
(22) a　The tax collector came back to the village.
　　b　Back to the village came the tax collector.

2．2．「oluta (오르다) 」と「ollakata (올라가다) 」の違い(「タイプⅠ」の場合)

「oluta (오르다)」と「ollakata (올라가다)」という動詞は，語彙的な意味が類似している。(23)の例を見ていただきたい。ここでは，主に「着点」の意味を表す「ey (에) 」との共起関係を中心に考察する。

(23) a　다로가 산 정상에 올랐다.
　　talo -ka san cengsang-ey oll　-ass-ta
　　太郎　が　山の頂上　に あがる　た
　　太郎が山の頂上にのぼった。
　　b　다로가 산 정상에 올라갔다.
　　talo -ka san cengsang-ey ollaka -ss-ta
　　太郎　が　山の頂上　に あがる　た
　　太郎が山の頂上にのぼった。

(23) aと(23) bの文は，直感的にはほぼ同義の文として解釈されるが，詳しく調べてみると，以下のような点において異なる。

まず，(23) a と(23) b は，「動作主（太郎）が目指した移動行為の着点である山の頂上に登りきった（到着した)」という意味である。ただし，「oluta（오르다)」という動詞が物理的な位置変化の意味を表すのは，(23) a のように「太郎が山の頂上を征服した」という抽象的な解釈が可能な場合だけである。これは(24) a や(25) b のように抽象的な解釈が不可能な場合は，成立しないことからも明らかである。ここでいう「抽象的な解釈」とは，単純な位置変化の意味だけではなく，その他の意味が含意されることをいう。つまり，(23) a は「山の頂上にのぼる」という位置変化の意味以外に「頂上を極める(征服する)」という意味が含意される。(25) a は，「演壇への位置変化の意味」と「(例えば)講演する」等の意味として解釈されるが，後者のほうが抽象的な解釈になる。

(24) a　다로가　(*2층/*옥상) 에 올랐다.
talo -ka (2chung/oksang) -ey oll　-ass-ta
太郎　が　(二階　/屋上)　に あがる　た
太郎が（二階/屋上）にあがった(のぼった)。

b　다로가 2층에 올라갔다.
talo -ka 2 chung-ey ollaka -ss-ta
太郎　が　二階　に あがる　た
太郎が二階にあがった(のぼった)。

(25) a　(太郎が講演などのために)
다로가 연단에 (올랐다/올라갔다).
talo -ka yentan-ey oll　-ass-ta / ollaka-ss-ta
太郎　が　演壇　に　あがる　た
太郎が演壇にあがった。

b　(太郎が演壇にある故障したマイクを修理するために)
다로가 연단에 (*올랐다/올라갔다).
talo -ka yentan-ey oll　-ass-ta / ollaka-ss-ta
太郎　が　演壇　に　あがる　た
太郎が演壇にあがった。

(24) b，(25) a，(25) b から「ollakata（올라가다)」という動詞は，動作主の意志による物理的な位置変化を表す。「oluta（오르다)」という動詞の場合も，動作主の意志による位置変化を表すことができるが，生産的ではなく，

ある種の抽象的な解釈が可能な場合に制限される。

以上のことから，前節で述べた「タイプⅠ」の場合，「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」という動詞の違いについて，「抽象的な解釈」という要素を捨象すれば「ollakata（올라가다）」として統一することが可能である。

「タイプⅠ」（動作主の意志による物理的な位置変化を表す場合）

動作主「i/ka（이/가）」	**場所名詞「ey（에）」** （着点）	「ollakata（올라가다）」

2．3．「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」のアスペクト的な特徴

2．3．1　時間副詞との共起関係

ここでは，前節でまとめた「タイプⅠ」を中心に「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」という動詞のアスペクト的な特徴について考察する。

(26) a　다로가 오후 한시에 정상에 올랐다.
talo -ka ohwu hansi-ey cengsang-ey oll -ass-ta
太郎 が 午後 一時 に 頂上 に あがる た
太郎が午後一時に頂上にあがった(到達した)。

b　다로가 오후 한시에 정상에 올라갔다.
talo -ka ohwu hansi-ey cengsang-ey ollaka -ss-ta
太郎 が 午後 一時 に 頂上 に あがる た
太郎が午後一時に頂上にあがった(到達した)。

(27) a *다로가 정상에 한시간동안 올랐다.
talo -ka cengsang-ey hansikan-tongan olla -ss-ta
太郎 が頂上 に一時間 あがるた

b *다로가 정상에 한시간동안 올라갔다.
talo -ka cengsang-ey hansikan-tongan ollaka -ss-ta
太郎 が 頂上 に 一時間 あがる た*8

(26)は，一時点を表す時間副詞との共起関係に関するテストであり，(27)は，継続時間の意味を表す時間副詞との共起関係に関するテストである。「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」という動詞は，(26)のように「ohwu hansi-ey（午後一時に）」という一時点を表す時間副詞と共起するが，(27)の

ように「hansikan-tongan（一時間）」という継続時間とは相容れない。(26)と(27)から，「oluta（오르다）」と「ollakata（올라가다）」という動詞には，アスペクト的には瞬間に終わる出来事を表す「起動相(inchoative)」的な意味が含まれていることがわかる。*9

(28)　다로가 한달만에 에베레스트산 정상에 올라갔다.
talo -ka hantal-maney eypeyleysuthusan cengsang-ey ollaka-ss-ta
太郎　が（　#　）エベレスト　の頂上　に　あがる　た

(28)は，(#)で示した「hantal-maney（한달만에）」という時間副詞との共起関係を調べるテストであるが，(28)については，「hantal-maney（한달만에）」の解釈によって二つの解釈が可能である。まず，「一ヶ月ぶりに」という意味として解釈すれば，「一ヶ月ぶりに登った」という解釈になる。つまり，「発話時以前の一ヶ月間は登っていない」という解釈である。また，「一ヶ月で」という意味として解釈すれば「一ヶ月かかって頂上に登った」という解釈になる。

Ceng, Mwun-Swu(1984)では，限界動詞(Ceng氏の用語では，「完成動詞」)構文の特徴として，限界動詞述語が「(時間名詞) maney（T-만에）」という成分と共起した場合，(28)のように，二つの解釈が可能になることを指摘している。

(29)　한달만에 웃었다/걸었다/사용했다.
hantal-maney wus-ess-ta/kel-ess-ta/sayongha -yess-ta
一ヶ月　ぶりに　笑う　た　/歩く　た　/使用する（使う）た
一ヶ月ぶりに笑った/歩いた/使用した（使った）。

(30) a　날씨가 한달만에 개었다.
nalssi-ka hantal-maney kay -ess-ta
天気　が（　#　）晴れる　た

b　얼음이 한달만에 얼었다.
elum -i hantal-maney el -ess-ta
氷　が（　#　）凍る　た

（訳文は省略）

(29)の述語として用いられている「wus-ta（웃다)」「ket-ta（걷다)」「sayongha-ta（사용하다）」などの動詞は，動きが成立した始発点はあるが，完成点(動きの終了点)は含意しない非限界動詞類である。Ceng，Mwun-Swu(1984)では，これらの動詞を「非完成動詞」として分類しているが，これらの動詞が「hantal-maney（한달만에)」という時間副詞と共起すると，「(T)の間，Vしていない」という意味しか表さない，と述べている。したがって(29)の文は，「一ヶ月間（笑って/歩いて/使用して）いない」という意味になる。

Ceng，Mwun-Swu(1984)では，(30)の述語として用いられている「kay-ta（개다)」「el-ta（얼다)」などの動詞については，動きが限界点に達することによって，はじめてその動きが成立する，という意味の限界動詞として分類している。これらの動詞が「hantal-maney（한달만에)」という時間副詞と共起すると，(28)で述べたような二つの解釈が可能になる，という。

「ollakata（올라가다)」という動詞は，以上で述べた「hantal-maney(한달만에）」という時間副詞との共起テストの観点から見ると，(28)，(29)，(30)のテストの結果から「限界動詞」的な特徴をもつことになる。

2．3．2　「-ko issta（-고 있다)」「-e issta（-어 있다)」との共起関係

韓国語の「-ko issta（-고 있다)」と「-e issta（-어 있다)」の意味・用法について，ごく簡単にまとめてみると，次のようになる。*10

韓国語の「-ko issta（-고 있다)」という形式は，前節で述べた非限界動詞類に後続すると，(31) aのように「動きの継続（動作進行）」の意味を表す。(31) bからわかるように，非限界動詞類は，「-e issta（-어 있다)」という形式とは結合できない。

(31) a　다로가 공원을 걷고 있다.
　　talo -ka kongwen-ul ket -ko issta
　　太郎 が 公園 を 歩く ている
　　太郎が公園を歩いている。
　b *다로가 공원을 걸어 있다.
　　talo -ka kongwen-ul kel -e issta
　　太郎 が 公園 を 歩く ている

限界動詞の場合は，「-ko issta（-고 있다)」という形式が用いられ，「結

果状態の継続」の意味を表す動詞類（(32)）と，「-e issta（-어 있다)」という形式が用いられる動詞類（(33)）とに分けられる。

(32)　다로는 모자를 쓰고 있다.
talo -nun moca-lul ssu -ko issta
太郎 は 帽子 を かぶる ている
太郎は帽子をかぶっている。

(33) a *다로가 뉴욕에 가고 있다.
talo -ka nyuyok-ey ka -ko issta
太郎 が ニューヨークに 行く ている

b　다로는 뉴욕에 가 있다.
talo -nun nyuyok-ey ka-(a) issta
太郎 は ニューヨークに 行く ている
太郎はニューヨークに行っている。

本稿の中心になる「ollakata（올라가다)」という動詞の場合は，前節で述べた時間副詞との共起関係のテストの結果から考えると，動きの継続の意味を表す「-ko issta（-고 있다)」とは共起しないことが予想される。

(34) a　다로가 정상에 올라가고 있다.
talo -ka cengsang-ey ollaka -ko issta
太郎 が 頂上 に あがる ている
太郎が頂上にむかってのぼっている。

b　다로가 정상에 올라가 있다.
talo -ka cengsang-ey ollaka -issta
太郎 が 頂上 に あがる ている
太郎が頂上にのぼっている。

(34)は，本稿の予想に反し，動きの継続の意味を表す「-ko issta(-고 있다)」と共起している。

しかし，(34) a の「cengsang-ey（정상에）」という場所は，決して「着点」の意味ではないことに注目していただきたい。これに対し，(34) b の「cengsang-ey（정상에)」という場所は，着点であり，太郎のいる場所の意味を表して

いる。

(27)c 다로가 정상으로 (한시간동안) 올라가고 있다.

talo -ka cengsang-ulo hansikan-tongan ollaka -ko issta

太郎 が 頂上 へ 一時間 あがる ている

太郎が頂上にむかって一時間のぼっている。

(35)?? 다로가 정상으로 (한시간동안) 올라가 있다.

talo -ka cengsang-ulo hansikan-tongan ollaka -issta

太郎 が 頂上 へ 一時間 あがる ている

太郎が頂上にむかって一時間あがっている。

(27)c と(35)は，(34) a と(34) b の「cengsang-ey (정상에)」という成分と「cengsang-ulo (정상으로)」という方向を表す成分が入れ替わった文であるが，文として成立するかどうかの結果は反対になっている。

以上で述べたことをまとめると，「タイプⅠ」は，次のようになる。

動作主「i/ka (이/가)」	**場所「-ey/-lo (에/로)」(「方向」)**	「ollakata (올라가다)」(「動きの継続 (動作進行)」の解釈)
	場所「-ey (에)」(「着点」)	「ollakata (올라가다)」(「結果の継続」の解釈)

3．結論と今後の課題

本稿では，韓国語の移動動詞の中で，「olu-ta(오르다)」と「ol-a kata(올라가다)」を取りあげて「V」型と「V+a(e)kata /ota」型の違いに関わる問題について考察を加えた。考察の結果，以下のことが明らかになった。

「olu-ta(오르다)」の場合は，動作主の意志による位置変化を表すことができるが，生産的ではなく，ある種の抽象的な解釈が可能な場合に制限される。この点は「ol-a kata(올라가다)」と異なる。

「ollakata (올라가다)」の場合は，

①「動作主の意志による主体の位置変化」

②「対象(THEME)の位置変化」

③「状態が自然に存在するあるいは状態が自然に発生する」，という意味を表す。

①と関連し，共起する「-ey（에）」格成分が「着点」の解釈が可能な場合だけ，「結果の継続」を表す「-e issta(어 있다)」の接続が可能である。「ollakata(올라가다)」の限界性というアスペクト的な特徴と着点成分との共起関係は，「非対格性(unaccusativity)」をめぐって日本語と共通する特徴である(竹沢(1991)など)。

③と関連し，発生の意味を表す構文においては，「NP　ey(에)→NP　i/ka(이/가)→移動動詞」の語順が最も自然であるという語順に関する制限が見られた。これらの現象については，日本語の発生構文と英語の場所句倒置構文を含めて考察する必要がある。この問題については今後の課題にしたい。

追記：本稿は，「韓国語シンポジウム(於筑波大学，1997年7月12日)」でおこなった口頭発表の内容に若干の修正と加筆を加えたものである。シンポジウムの会場では塚本秀樹(愛媛大学)先生，野間秀樹(東京外国語大学)先生，その他にも多くの方々から貴重なご助言をいただいた。また，本稿の作成に当たっては，筑波大学の竹沢幸一先生，橋本修先生，矢澤真人先生，吉田和史先生，鷲尾龍一先生からご指導をいただいた。記して心から御礼を申し上げる。なお，内容に不備な点や先生方のご指導を十分に生かせなかった点があった場合，その責任はすべて本稿の著者にある。

注

＊1　本論文は，筑波大学内の「東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究組織(代表：原口庄輔)」の研究成果の一部である。

＊2　韓国語において「V」と「V+a(e)kata　/ota」の対応を示すのは，本論文で取りあげる移動動詞だけではなく，一部の状態動詞(iss-ta(있다)：いる/＊iss-e kata(있다+가다))を除いて幅広くこの対応が見られる。

＊3　韓国語に対するローマ字表記は，Martin, Samuel. E. et al. 1967『A Korean-English Dictionary』の表記法に従っている。

＊4　(2)と(3)は，成田(1979)から引用。ただし，例文番号は安によるもの。

＊5　「ollakata（올라가다）」という動詞は，「oluta（오르다：あがる）」と「kata（가다：いく）」という動詞が合わさった複合動詞と見る立場もあり得るが，ここでは問題にしない。

＊6　これらの格以外に「φ」，「-ul(lul)（을（를））：対格マーカー」格についても考慮しなければならないが，「主題」「視点」「焦点」「強調」など意味論的な問題がかかわるのでここでは取りあげないことにする。特に，三宅(1996)と関連して，韓国語の意味格の対格表示については別稿を準備している。
また，Nam，Ki-Sim(1993)では，「-ey（에）」は「場所」の意味を表し，「場所」は大きく「所在地」「行為地」「目標地」「到着地」「接地」「根元地」に分けている。

＊7　(14) a，(17) a が(16) b，(18) a に比べて若干よくなるのは，「i/ka(이/가)」格成分と動詞の意味との関係から，動詞に過程(process)が含意されるようになると，「i/ka(이/가)」格成分に動作主性が感じられやすくなるからである。この場合，「-ey(에)」格成分は，着点になる。

＊8　(27)の日本語訳は省略する。

＊9　「起動相」については，たとえば影山(1996)p. 57などを参照されたい。

＊10　韓国語の「-ess（었）-」というテンス形式の表す意味については，安(印刷中)を参照されたい。

参考文献

日本の文献

安　平鎬(印刷中)「韓国語の「-ess（었）」をめぐって」
『タの言語学』つくば言語文化フォーラム　ひつじ書房

影山太郎(1980)『日英比較　語彙の構造』　松柏社
(1996)『動詞意味論－言語と認知の接点－』　くろしお出版

竹沢幸一(1991)「場所，着点および二次述語の「に」」
『現代英語学の歩み』安井稔博士古稀記念論文集編集委員会　開拓社

成田徹男(1979)「動詞の意味と格－「移動」に関する動詞を中心に－」
『人文学報』132　東京都立大学人文学部

三宅知宏(1996)「日本語の移動動詞の対格表示について」
『言語研究』110　日本言語学会

Martin, Samuel. E. et al.　1967.　A Korean-English Dictionary. New Haven : Yale University Press.

韓国の文献

남기심(1993)(Nam, Ki-Sim(1993))
『국어 조사의 용법-'에'와'로'를 중심으로-』　서광학술자료사
전수태(1986)(Cen, Swu-Tay(1986))
「国語移動動詞の　意味研究」博士学位論文（高麗大学校大学院国語国文学科）
정문수(1984)(Ceng, Mwun-Swu(1984))
「相的　特性에 따른　韓国語　풀이씨의　分類」
『문법연구』5　塔出版社